

小学校社会科における地理教育的視点

——豊田の自動車工業を事例として——

水野雅夫*

I. はじめに

公立小学校の教育現場では学級担任制を取るために、教師は最大8教科の指導と学校事務、部活動、クラブ、委員会および公務分掌を行なう。ここでは様々な問題を抱え翌日の授業の教材研究もままならない状態にある。ましてや、地理教育を意識する実践は非常に困難である。研究発表校における特別の研究授業ならば思い切った工夫も可能であるが、残念ながら、地理教育を主題にした社会科実践の事例はほとんど見られない。これは単に多忙だけでなく、小学校の社会科の中で地理教育を意識した実践はどのようにして良いのかわからない教師が多いためであると考えられる。

しかし、小学校3、4年生(中学年)の地域学習や5年生の社会科では、地理教育的視点を取り入れることが可能である。これは、指導要領を軸に普段の教育活動を行なっている公立小学校においては、むしろ日常的な社会科の授業で大切な視点であると考え¹⁾。

筆者はこれまで小学校の中学年および高学年の社会科について、明治用水、商店街、三河仏壇を教材とした実践に基づく帰納的な研究を行ってきた。その結果次のようなこと

が明らかになった。明治用水²⁾の実践では、現在の明治用水の直接観察から学習を始め、自然に過去にさかのぼる形で要因追求的な単元構想を組む方法が有効であることが判明した。商店街³⁾の実践においては、児童がある程度の共通基盤に立って物事を考え話し合うための共通問題をいかに教師が作り上げるかといった指導原則が明らかになった。そして、三河仏壇⁴⁾の実践においては、小学校5年生社会科の内容の難解さを指摘した上で、分布図の読取り、要因追求的な単元構成、歴史的・自然的条件の考慮の3点を地理教育的視点として提出した。しかし、基礎知識の不足や具体的な歴史的資料の欠落から要因追求的な単元構成と自然的条件の検討には限界があることが明らかになった。その後筆者は、地理教育的視点の検討と実践化に向けた研究を継続してきた。その結果、日頃の授業でいかに多くの場面で地理教育的視点を取り入れることができるということを実感してきた。

そこで本稿は、小学校5年生の社会科実践において、地理教育的視点は十分に取り入れられるという考えから、その具体的な授業構成案を提出し、その実践の中から小学校社会科で導入可能な地理教育的視点を抽出することを目的とする。

* 豊田市立若園小学校

II. 地理教育的視点と研究主題

筆者は地理教育的視点という言葉を、従来の地理的見方・考え方とほぼ同義で使用している。しかし、その言葉の意味内容については曖昧な部分が残されている。そこで、従来の研究から地理的見方・考え方の意味するところを整理し、本稿における地理教育的視点の定義を行いたい。

松井貞雄は地理的見方・考え方にあたりと考えるものとして、「新指導要領の強調点から、①自然と人間との関係、②地域と地域との関係、③地域的特色の把握、④比較研究、の4点を地理学的研究方法として、①景観的考察、②分布的考察、③立地的考察、④地域的考察、⑤地域形成過程の考察、の5点をあげて」9項目に整理⁵⁾した。

出石一雄は、「分布的見方・考え方、相関的見方・考え方、地理的見方・考え方」⁶⁾として整理し、これに基づくテストの実施結果から児童の到達度を分析した。

鳥海公は、一連の地理的見方・考え方の研究の中で、「位置、分布、地域、地域的特色、地域性の形成、他地域との関係、地域形成の主体としての人間という考え方、地域の変化」⁷⁾を取り上げて実証した。

朝倉隆太郎は、「①地理的位置を理解する能力、②方位や距離について理解する能力、③場所的差異を理解する能力、④相互関係を理解する能力、⑤地理的事象を地域的にまとめ、その特色を把握する能力、⑥絶えざる変化を理解する能力、⑦グローバル（地球的）な見方ができる能力」⁸⁾を挙げている。

安藤正紀は、学力観に関する考察⁹⁾の中で、菊地利夫、川合元彦、榎原康男、朝倉隆太郎

らの地理的見方・考え方に対する定義を整理し紹介している。

これら地理教育研究者たちの主張を一つ一つ検討してゆくと一致する点も多々あるが、山口幸男の地理意識全体について「その全体像や内部関連はいまなお明確とは言えない」¹⁰⁾という指摘は、範囲を狭めた地理的見方・考え方の定義にもあてはまると筆者は考える。これら一つ一つの語句の意味する内容の検討は、それ自体重要であるが¹¹⁾、厳密な意味での定義の検討は困難であり、また、さしあたっての重要課題ではない。

そこで筆者は、小学校での実践経験のある松井貞雄と鳥海公の主張を引継ぎ、取り敢えず次の7点を地理的見方・考え方の定義とする。①景観的考察、②実地調査、③資料的考察、④分布的考察、⑤地域的考察¹²⁾、⑥地域形成論的考察、⑦立地論的考察、以上はあくまでも仮りに定義¹³⁾した地理教育的視点である。

さて筆者は、最近展開されているアメリカ合衆国の地理復興運動の動向について関心がある。全米地理学協会は「①位置、②場所、③場所内における相互依存関係、④移動、⑤地域」¹⁴⁾の5大テーマに基づいてガイドラインを作成し、授業モデルを創り上げて現場教師に提案している。そして、この運動の基底に流れているものは、いかに楽しく地理的な基礎知識を社会人や学生・児童に身に付けさせるかである。これは1990年の日本地理学会の地理教育検討委員会での答申¹⁵⁾でも表れているように、実質陶冶重視の方向性である。とくに、小学校教育において、それが強調されていると筆者は考えている¹⁶⁾。

しかしながら、日本ではこれからの時代に

自主性や創造性の育成が重要であるとするのが教育界での一般的風潮である¹⁷⁾。1992年の小学校学習指導要領改訂、全面実施ににあたっては個性と創造性豊かな学習意欲や態度の育成が強調されている¹⁸⁾。従って、日本地理学会での議論や検討を理解しつつ、文部省からの法的拘束を直接受ける筆者は、自主性や創造性を育てる実践カリキュラムと実質陶冶を重視するカリキュラムの融合をどのように図っていくかが大きな課題となる。

本稿は、以上のような意味において、児童の自主性を育てながら地理的知識もあわせてつけていくという実践上の努力を続けてきた結果である。結論部分において、実践から引き出された地理教育的視点を再度整理することを試みる^{19,20)}。

Ⅲ. 実践の概要

小学校5年「自動車工業」の単元を事例実践として、本稿の主題を検討していきたい。第1表が実践を終えた時の単元構成である。

(1) 組立工場の内部と生産工程

本学年の児童は、夏休みにトヨタサマースクールという工場見学に参加した。そのために10月下旬から11月にかけて実践した内容には(第2表参照)、工場見学が含まれていない。見学からだいぶ時間がたっているため、その見学を思い出す意味から、第1時は自動車の製造工程の確認から入った。第2時は、教科書の口絵写真(生産ライン)を資料として、生産の様子や工夫について追求する授業を行なった。写真資料だけでは資料が不足していたため、児童の発言は活発とは言えな

第1表 実践「豊田の自動車工業」における指導展開事例

段 階	時間	ね ら い	内 容	視 点
組み立て工場	1	自動車組み立て工場内の生産工程と	・工程の理解	具体的観察・再現
	2	生産の様子およびその工夫について	・生産ライン・流れ作業	
	3	資料を基に追求する。	・あんどん・ひっぱりひも	
	4		・ジャストインタイム	
関連工場	5	関連工場の存在とその様子を確認する。また、愛知県内の分布を読み取る。	・スピードメーター分解	関連図
	6		・関連工場の様子(ビデオ) ・分布図読み取り	分布図
地域	7	豊田市の移り変わり自動車工業の発展を関連づけて読み取る。	・ひとり調べ	資料 話し合い 地域
	8		・追求 ・話し合う	
全国	9	全国の自動車工業の分布の特色から全工業の分布および工業地帯へと関連づけて理解する。	・分布図読み取り ・全国の工業地帯の説明 ・作業	全国 分布 立地
全国	10	日本の工業地帯・地域の存在と中心的な工業の構成について話し合い理解する。	・ひとり調べ	全国 分布 立地
	11		・分布図とグラフの関連	
	12	評価	・テスト ・授業感想	

第2表 小学校5年生社会科「自動車工業」の実践事例(1989)

①10/28(土)	自動車の製造工程	社会科資料集5年(教育同人社) p.64
②10/29(日)	組み立て工場の工夫や努力(両親学級)	教科書(東京書籍)口絵
③11/2(木)	組み立て工場の様子	トヨタ自動車KK広報部のビデオ
④11/6(月)	生産の工夫(ジャストインタイム)	トヨタ自動車KK広報部の説明紙
⑤11/7(火)	関連工場の存在	同上のビデオ、スピードメータ分解
⑥11/11(土)	組み立て工場と関連工場の分布	社会科資料集5年(教育同人社) p.63
⑦11/13(月)	豊田市の移り変わり(グラフ読み取り自習)	教科書(東京書籍) p.20のグラフ
⑧11/15(水)	豊田市の移り変わり(話し合い)	同上
⑨11/22(水)	全国組み立て工場と関連工場の分布	社会科資料集(教育同人社) p.62
⑩11/24(金)	日本の工業地帯と工業地域の分布・特色(読み取り)	地図帳(東京書籍) p.57
⑪11/29(月)	同上(話し合い)	同上

った²¹⁾。そこで、再度、組立工場内の様子がよくわかる授業をめざしたのが第3時と第4時である。第3時は、トヨタ自動車広報部から借りてきたビデオをつかって、改めて生産ラインや塗装の工程を学習した。第4時は、さらに組立工場の生産の工夫を追求するために、工場見学の際にもらった教師用プリントを資料とした。あんどん、ひっぱりひも、はり紙、ジャストインタイム、という生産の工夫や概念まで追求できた。

(2) 関連工場の確認と分布の読取り

第5時と第6時は、自動車工業にとって不可欠の関連工場について学習した。第5時は、先に利用したビデオの続きによって関連工場の存在を確認した。第6時は、愛知県内の組立工場と関連工場の分布を読み取った。教科書²²⁾においては、「働く人の苦労や工夫」を全面に押し出している。しかし、本実践では分布図の読取りに慣れていくという目的がある。そこで、豊田市と名古屋市に工場が集まっているという分布の特色から、改めて自分たちが住んでいる豊田市という地域に目を向けさせていく筆者の意図があった。働く人の苦労や工夫が十分に取上げられなかったの

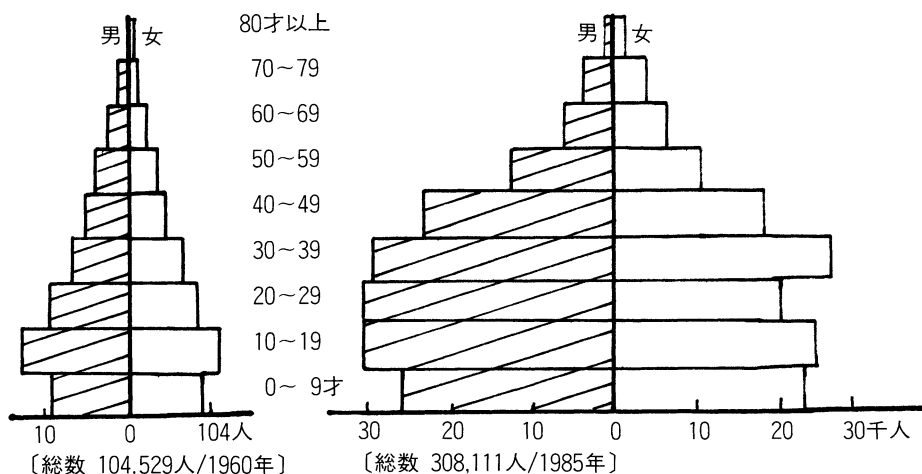
は、本実践の欠点である。しかし、その代わりに自動車の町豊田市という地域を分布図の中で確認し理解できたと考えている。

(3) 豊田市の人口増加と自動車生産の拡大

第7時と第8時では、第6時で意図した地域＝豊田市を取り上げた。児童は、既に小学校3年生時に地域学習で、豊田の自動車工場を学習している。従って、それと重複しない形で地域を意識する必要があった。そこで、小学校3年生では理解困難と思われる豊田市の年齢別人口構成と車の生産台数の変化を組み合わせたグラフ²³⁾を読み取ることにした。第7時は課題となるグラフのひとり調べ、第8時はそれに基づく話し合いを行なった。どの児童もたくさんノートに書いてあり、活発な話し合いが行なわれた。地理教育的視点としては、豊田市の人口増加と自動車生産の拡大がほぼ一致するという「地域形成」の視点が十分に取り入れられたと考える。

(4) 全国の自動車工業の分布の特色

第9時以降は、全国に学習対象を移した。第9時は、全国の自動車の組立工場と部品工場の府県単位の分布の読取りを行なった。ここでは、その分布を読み取ることが第1の目



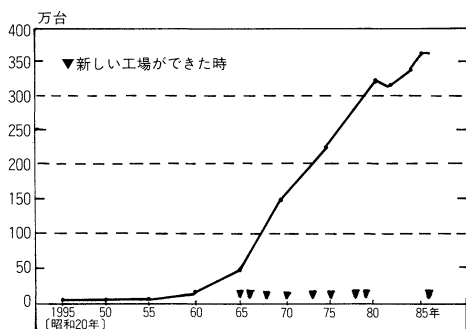
第1図-A 豊田市の年層別の人口構成の変化〔豊田市統計書による〕
〔出典〕東京書籍5年社会下 p.20 (昭和63年3月31日改訂検定済)

的であるが、その読取りの中から、太平洋側に自動車工場が多く立地しており、それはなぜかを考える契機にしたいという意図があった。つまり、自動車工場の全国的な分布から立地条件の検討をめざしたものである²⁴⁾。

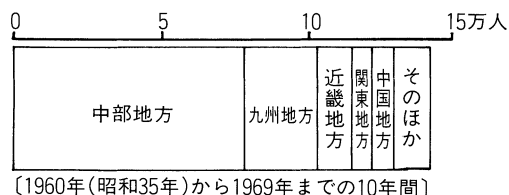
(5) 全国の工業地帯・工業地域

第10時と第11時は自動車工業から離れて、全国の工業地帯・工業地域の学習とした。こ

れにはたいへん無理があるという反論があるだろうが、あえてこのように構想した。なぜなら、自動車工場の分布と北九州工業地帯を除く太平洋ベルト地帯の工場の分布は重なるのである。これは、工業の中心的存在である輸送機械製造業の分布であるから当然なことで、いわば自動車工業を一つの事例として全国の工業地帯を考えていこうとする意図がある。この点に関連して理解されるかどうか、5年生社会科の国土理解のカギになる。また、ここが5年生の社会科は難しいと不評²⁵⁾をかうところでもある。



第1図-B 豊田市に本社のある自動車工場の生産台数の変化〔自動車会社の資料による〕
〔出典〕東京書籍5年社会下 p.20 (昭和63年3月31日改訂検定済)



第1図-C 豊田市にうつってきた人の地方別のわりあい
〔出典〕東京書籍5年社会下 p.20 (昭和63年3月31日改訂検定済)

本時の授業では、41人中19人の発言があった。全国の工業地帯の分布と各工業地帯の工業生産額の構成を示すグラフの複合資料を読みこなすという高度な内容を、19人の児童の発言から引き出したという点で、筆者の授業の目標がほぼ達成されたと考えた。この授業によって、工業地帯における工業生産額の構成は、鉄鋼や機械など重化学工業を中心とするという一般の共通性が児童に理解できたと考えられる。

Ⅳ. 授業分析

(1) 豊田市の移り換りと自動車工業の発展

ここでは実際の授業の具体的な話し合いの場において、地理教育的視点がどこに表れ、教師はどう対応したか、という視点から授業分析をしていきたい。

まず、第7時は豊田の自動車工業の地域形成を理解することをねらいとした授業であった（授業記録「豊田市の移り変り」参照）。

最初、中部地方各県から豊田市に8万人もの人々が集まってきているというKK君²⁶⁾の意見（資料下線①）から、豊田市への移住者の出身地方の意見が相次いだ。その中で、YA君の発言（資料下線②）の半分という言葉をとらえて、筆者は何の半分かと聞き返した。これは5年生の最初から筆者が強調してきていることで、資料を読み取る場合には正確にその数量関係を押さえるという意味である。5年生の社会科では資料の読取りがひとつのキーポイントであり、農業学習から数多くの資料と出会うことになる²⁷⁾。そこで筆者は、正確に数字まで出してグラフを読み取ることを指導してきた。これは、資料下線④の

教師発言にも表れている。

次にIKさんの発言（資料下線③）は、グラフを複合的に読み取っている点で重要である。すでに、この段階で地域形成を理解する一つの発言が出てしまった。しかし、他の多くの児童たちは、それが重要であることに気付かずに、自分の読取りを発言するのに一生懸命である。さらに、SK君の発言（資料下線⑤）はIKさんの発言（資料下線③）とあわせて、授業前半にもかかわらず、この授業の結論が出てしまう程注目すべきものである。つまり、自動車工業地域の形成から単一企業都市豊田と言われる企業城下町の形成を、小学生として実にわかりやすく話している。ここで授業を止めても良かったが、たつぷりと話し合うことが一つの目的であったし、児童の勢いのある発言がどんどん続くので止められなかった。

これに加えてMOさんの発言（資料下線⑥）も重要であった。一つの都市で人口が20万人以上も増加するという指摘は、人口の視点から豊田市の発展を如実に説明している。まさに地理教育的視点の発露である。ここで教師は児童の話し合いに割って入るべきであった。しかし、一方で話し合いを止めたくないという一瞬の迷いがあったため、割って入る時期を逸してしまった。

筆者がようやく発問をしたのは授業の後半に入ってからであった（資料下線⑦）。まとめの意味を含めて、第1図-A、B、Cのグラフを関係付けて考えるというものであった。これに対して、第1図-Aのグラフを中心とする性別・年齢別人口構成に関する発言（資料下線⑧）が出てきた。前のSK君の発言（資料下線⑤）にさらに踏み込むような、地域形

授業記録『豊田市の移り変わり』1989、11、15（水）第7時

- T この前月曜日の5校時の時に自習で今日の勉強するところを読み取ってもらいました。とてもたくさん読み取りが書いてあって先生は非常に心強く感じました。非常に良かったです。今日はその見つけた事を話し合います。それでは、2、3分ノートを読み返して考えをまとめて下さい。（3分）それでは始めましょう。KK君。
- KK 1番上のCのグラフで中部地方で数が約8万人で、考えは豊田市は中部地方から来た人が多い。①
- MT KK君に似ていて考えで中部地方から集まって来る人は九州地方から来た人よりも多いです。
- YA MT君やKK君とにているけど、考えだけど、中部地方から豊田市に来る人は半分以上です。②
- T 何の半分だい？
- YA Cのグラフの半分です。
- T Cのグラフ全体の半分以上が中部地方だという意味だね。
- HT 1番下のAのグラフで言うんだけど、80歳以上の人が1860年から1985年の間に人数が変わっていない。
- IK 65年から80年にかけて新しい工場だいでできてきた。真ん中のBのグラフから、考えで1960年から1985年に人口が増えているから新しい工場ができて、他の県や市から豊田市に働きに来た人たちが多い③
- TN 1番下のAのグラフで、1960年から1985年を見て、人口が増え続けている。ちょうどそのころから工場がたくさんできているからだと思う。
- TH Cのグラフの中部地方で様子で1番人口が多いで、どうして人口が多いのか？
- YT Aの人口構成の資料ではじめの頃は豊田市はそんなにいなかった。
- T 始めていつ頃だ？
- YT 1960年ごろです。
- MS Aのグラフで20～29歳と30～39歳と40～49歳で働く年で、自分の考えは20歳から49歳が1番働き易い。
- MT Bのグラフで、1945年から1955年は車が10万台ぐらいしか作っていないけど、1960年ぐらいから1980年にかけてものすごい勢いで増えている。
- T ちょっと待って、とても大切なことだね。車の台数を読み取ってくれるといいんだな④
- MO Cのグラフ全体で豊田に移ってきた人は約14万人で、1960年から1969年の10年間でこんなに豊田市に移って来た人がいるのは、新しい工場がたくさんできたからだと思います。
- KK T君につけたして、遠くの工場がたんさんできるにしたがって車の性能が良くなりどんどん速い車になっていくので、だから急速に増えた。
- SS T君につけたして55年からBのグラフで85年まで約350万台増えている
- SSg 車の数で1982年は1980年よりも約20万台減っている。何で減ったのかな？
- MN BのグラフとAのグラフで、Aのグラフの方で1960年代ぐらいいは働く人が少ない。Bのグラフでも車は10万台ぐらいいしかできていない。
- TI Cのグラフで九州地方でよく2.5万人で考えが、何で豊田市から遠いのに九州地方から来る人がたくさんいるのか？
- IT MH君につけたしてBとAのグラフで1965年から1980年までに新しい工場がたくさんできて、だから1985年までの人口構成の変化は大きい。
- SK CとBのグラフでいっぱいの人が移りすんで来るから、その分、自動車会社の人の数が増加して工場の大きさも大きくなって、それで生産も多くなって人口が多くなると、その分他のもの一会社とかそういう所も発展して来ると思いました。⑤
- MM Aのグラフで30～80歳まで上になるにつれてだんだん低くなっている。
- SD Bのグラフで1945年ごろは工場が少ないので生産台数も少ない。
- MO Aのグラフで全部の人口の総数は1960年は104529人だけ1985年には308111

	人になって、25年間で203581人増えた。⑥		が、もう何人もの人が2つのグラフを関係つけて発言をしている。3つのグラフを関係つけて考えるとどんなことが言えるだろうか?⑦
MT	たくさん車に乗る人が多くなったから、車の生産量も多くなった。		
MH	Bのグラフで73年ぐらいから76年ぐらいまで300万台になっている。今までは10年から20年ぐらいで200万台になっているのに、すごいなと思った。	WY	関係は移って来た人が多く、その人達が工場に入って生産台数が多くなる。(いいですの声多数あり)それで、男の人が多いから工場働く男の人が多いと思いました。
AH	Bのグラフで80年から87年までで、考えは45年から65年までで新しい工場は1つしかできていない。	T	すばらしいね。男の人が多いという意見は今までだれも発言しなかったね。工場働くのは男の人が多から当然1番下のグラフには男の人が多く表れるね。⑧
YK	Bのグラフで80年から87年にかけて考えは工場がその間にでき方が少ないので、生産台数も相当に減っている。また、85年にできて生産台数が上がった。	YK	豊田市にトヨタ自動車という大きな会社の本社があるので、半々に男の人で20代~40代の人が多く多いから、工場が成り立っている。
TJ	真ん中のBのグラフで1970年で考えは1975年に新しい工場ができて150万台を越えた。	IK	人の変化のところで、お年寄りの人がそう増えなくて若い人が大体30から39歳の人が1960年から1985年に増えて、その増えた人のほとんどは豊田に来た人で、新しい工場に勤めていて、その移って来た人は中部地方の人なんだな。
YA	Bのグラフで1985年は生産台数が約360万台で1年間に生産している。	MT	1980年ぐらいに生活台数が減って、また増えている。(後略)
SS	真ん中のBのグラフで1945年から1960年までは工場が1つしかできていないで、あまり生産台数が上がらなかった。65年から85年にかけて9個新しい工場ができたから生産台数もだいぶ増えた。		
T	よくがんばってくれて大変うれしい		

成的視点の発言は出なかった。

このように、話し合いとしては児童中心でありながら、意見の出しあいという様相が強く、筆者の本時でねらう内容は授業の前半に出てしまう結果になった。授業構成としてやや不満の残るものである。しかし、3つのグラフから読み取る豊田市の移り変りと自動車工業の発展は、児童の話し合いの中で十分に出てきたとすることができる。

(2) 全国の自動車工業の分布の特色

第3章で述べたように、この第9時は本単元構想の中で、自動車工業の事例から全国の工業地帯へ視点を移す最も重要な授業であった。

具体的な授業分析に入ろう(授業記録「全国の自動車工場の分布について」参照)。まずSD君の発言(資料下線⑨)のように、県単位の分布を正確に把握した発言が目立っ

授業記録『全国の自動車工場の分布について』1989、11、22(水)第9時

T それでは、今日は日本の自動車工場の分布について勉強してみよう。資料集62ページの1の資料を出して。ノート

はいつものように3段に区切って。そして、分布図を読み取るのは2度目だね。1番上には県や物、真ん中には様

	子や数字、1番下には気づいた事・考えた事を書こう。それでは、今から時間を7分取るから、これを地図から読みとって。		
T	記録した事を基に話し合いをしていきたい。それでは、Y男君。		
YK	北海道で自動車工場も部品工場も1つもないで、考えは工場もなのにどうやって自動車に乗るのか不思議です(笑い)。		
HS	群馬で自動車工場2つ、部品工場4つある。		
T	もうちょっと大きい声で発言しないさい。		
YA	北海道では土地が広いだけで自動車は作っていない。		
SD	愛知県で部品工場が17コで、自動車会社が11で日本一。⑨		
MMb	岡山、山口、福岡、熊本には自動車工場が1つしかなくて、考えで他の事が盛んだと思います。		
MS	愛知県で自動車会社が11コで、他の県より多い。		
HT	神奈川県で、神奈川県より大きい県はいくちもあるのに、自動車の工場は2番目に多い。		
MO	神奈川、静岡、愛知は自動車工場も部品工場も多いし、それは太平洋側に面している県で、太平洋側に多い。⑩		
MH	全部の自動車工場で数字や様子はなくて、自動車が道いっぱい広がったら人間も歩けないし、歩いた方がいいので、何でこんなにつくるんだろう。		
TH	県と物で、東京で自動車会社が5つで、ほとんど自動車は使わず自転車や電車が多数だと思います。		
SK	T男君に反対して、愛知県は自動車会社は1番だけど、神奈川県で部品工場は18000人以上働いているので、神奈川県は愛知県よりも部品工場では多いと思います。		
MMg	県は愛知県で、物は自動車工場と部品工場、その数が自動車工場の方が部品工場よりも数が少ない。		
MT	北海道で考えで、北海道は移入に頼っていると思う。		
SSg	愛知県と神奈川県で愛知県は自動車会		
			社の工場は11コで部品工場は17コで神奈川県は自動車工場が6コで部品工場18コで、考えは愛知県は自動車工場が多く、神奈川県は自動車部品工場が多い。⑪
		SSb	三重県と愛知県で2つの県を比べると、三重県は愛知県の近くだから、自動車会社の数が少ない。
		TI	全部の工場、自動車工場は56で部品工場は48で、部品工場働いている人が多い。
		T	ちょっと待って、今、自動車工場は56、部品工場は48って言わなかった違うよね。自動車工場は48、部品工場が56だね。みんな数えたか？
		YT	北海道でYK君とYA君に反対して、YK君たちは北海道に自動車がないと言ったけど、ぼくの考えは1000人以上働いていないで、小さい工場はあると思う。
		KK	岐阜県で自動車工場は0コで部品工場は3つで、自動車工場がないのに部品工場があるのがなにか変な気がする。
		IK	全部の工場、北のほうへ行くと工場が少なくなって西の方も少なくなって少ないところは工業も盛んでなくて、たぶん農業やサービス業が盛んなのだろう。関東地方や中部地方に集まっている。⑫
		MH	太平洋側に多いのは、あ、資料集の最初のところだけだ。
		T	みんな開いてみて。資料集の最初の細長い地形を表す写真だね。
		MH	太平洋側の反対の方を見てみると、山々があるから工場はあまりできないおもう。⑬
		IT	地図帳の57ページで……。
		T	みんな、今資料集を開いているね。今度は地図帳だよ。57ページ。
		IT	熊本と福岡は、熊本の人口と福岡の人口は熊本の方が少ないから、自動車工場も少ないと思う。
		YW	1台の車に部品が3万個で、部品工場が57あるから、1つの工場500ぐらいの部品を作っているからすごいと思いました。(後略)

た。MMb²⁸⁾、MS、HT、と進み、MOさんの発言(資料⑩)は早くも本時のねらいをついた発言なので、筆者は驚いた。授業の後半で筆者が太平洋ベルトにつなげたいとする意図をくみとった発言である。このような場合、授業の後半ならば筆者が出て強調するのだけれど、早いうちに出てしまったので、そのまま話し合いを続けることにした。

その次にSSgさん(資料下線⑪)のような自動車工場と部品工場の分布を正確に読み取る発言がみられた。

授業の後半に入ってIK君の重要な発言(資料下線⑫)が出た。太平洋ベルトにつながる発言である。その次にMH君の発言(資料下線⑬)はさらに重要であった。つまり、太平洋側に工場が集まっているという分布の特色から、それはなぜか、地形と関係あるのではないかと、その要因を考えているのである。それに続いて、IT君の発言(資料下線⑭)は人口の視点から福岡と熊本の自動車工場の数の違いを説明している。この一連の発言(資料下線⑫～⑭)は共に、分布の特色からその要因を考えようとしている点で意味があった。まさに地理教育的視点の表れた発言と言うべきだろう。発言自体は正答とは言えないが、小学校段階から地理的に資料を読み取る芽生えが育ってきたと判断できた。

V. 結論(地理教育的視点の抽出)

これまでの実践の概要と授業分布をふまえ、地理教育的視点を抽出すると、以下の諸点があげられる。

(1) 具体的観察力および見学事象の再現(景観的考察)

トヨタサマースクールで工場を見学し、それを思い出す形で教科書の写真資料から、自動車の製造工程における特色を見出す授業を試みた。時間が経過していたため、ビデオ視聴で製造工程における特色を発見し、そこにおける合理的な種々の生産の工夫を理解できた。工場内の機械は非常に複雑なので、ビデオはとても有効であった。

このように見学したことの様子を話し合う再現授業は、観察力を高め、対象地域の景観的考察を楽しみながら実践できる有効な方法であると結論²⁹⁾できる。

(2) 見学時の聞き取り・メモ(実地調査)³⁰⁾

本稿の実践においては、工場内で熱心にメモをとっていた児童が数多くいた事実がある。これは中学年社会科の地域学習段階から、数多くの見学学習を行ってきた結果である。中学年の地域学習においては、筆者が見学ノートを作成して配布したり、事前に質問事項を考える時間をとったりして実地調査的指導を重ねてきた。小学校高学年では、このような中学年の地域学習の成果をいかに受け継ぎ発展させるかに、課題があると言える。

(3) 写真・グラフ資料から社会事象の特色を読み取る(資料的・地域的・地域形成論的考察)

本稿においては、第1図の読取りが資料的考察の典型的な実践となる。筆者は4月にこの学級を担任した時から、1枚の写真1葉のグラフについて、その中に存在する物、その様子、それらから考えられることは何か、と3つに区切っていいねいに読み取ることを指導してきた。その指導の成果の一部が第7時の

授業である（第4章第1節参照）。

それは、第1図-Bのグラフからトヨタ資本が工場を建設するたびに自動車の生産台数が増加していったことが読み取れる。ここからIK君やSKさんの発言は工場の増加と豊田市の発展を関連づけることができた（授業記録「豊田市の移り変わり」資料下線③および⑤）。これによって、児童は自然と豊田市を中心とする自動車工業地域を意識するようになった（地域的考察）。さらに、MOさんの発言は豊田市の飛躍的な人口増加を指摘し（同資料下線⑥）、それが筆者の発問とあいまって性別・年齢別人口構成の内容まで話し合いが及ぶようになった（地域形成論的考察）。このように、第1図の読取りは、地域の考察と地域形成論的考察を含む資料的考察のできた重要な授業実践であった。

しかしながら地域内部の機能分化（組み立て工場と関連工場の集中地域など）については授業で取り上げなかった。地域的考察としてはいまひとつ不十分だったと考える。

(4) 分布図読取りと特色把握（分布的考察）

第6時愛知県内の自動車工場と関連工場の分布図を読み取る授業を構成した。この話し合いでは、豊田市と三好町を中心に自動車工場や関連工場が集積していることを容易に読み取ることができた（分布的考察）。

ただし、分布的考察の授業では、本稿のように読み取るだけでなく、資料を用意して実際にドットするという作業を取り入れることも可能である。

(5) 立地条件を考える（立地論的考察）

本稿では、第9時と第11において立地条件の検討を行なった。残念ながら、個別具体事例であるトヨタ自動車の工場立地はあつかえ

なかった。しかし、全国の自動車工場の分布と日本全体の工業地帯・工業地域の分布から、立地条件を考えようとしていたのである（授業記録「全国の自動車工場の分布について」資料下線⑫および⑬）。ここから「なぜ自動車工場は太平洋側に多く集まっているか」という学習問題をつくり、さらに追求することも可能であった。残念ながら、筆者の準備不足でそれ以上の正確な資料に基づいた検討はできなかった。しかし、立地論的考察の芽生えは十分に引き出すことができた。

以上において、本稿における地理教育的視点の抽出と授業の関係の考察を終える。しかしながら、小学校で実践可能な地理教育的視点は本稿が指摘した上記7点だけではない。小学校低学年において、位置や方角の指導³¹⁾は可能である。貿易の単元においては、グローバルな視点を小学生に指導することは容易である。農業の学習では、自然と人間の関係を考える授業を構想することができる。結論としては、現場の小学校教師が社会科実践の中で、何が地理教育的視点なのかを意識して指導することである。また、日本の小学校の教育現場では、実質陶冶を考慮にいたした実践を可能にする素地を残している。国民の地理的教養の危機的状況を招いているアメリカ合衆国の轍を踏んではならない。そのため、日本の地理学会は、学習の主体性を育てながら一方で基礎的知識を大事にする実践事例を、早く蒐集し、帰納的に授業モデルをつくりあげて多くの小学校教師に公開³²⁾することを訴える。

〔付記〕本稿の内容は1990年9月30日に日本地理学会秋季学術大会（於上越教育大学）において口頭発表し、研究者の批判を得た。特に発表の骨子については、松井貞雄氏（愛知教育大学

名誉教授)の丁寧な事前指導を得た。記して厚く感謝申し上げる次第である。

注

- 1) なぜならば、中学年の地域学習では小学校区という狭い範囲ではあるが、地域内の土地の高低や道路そして各種の産業を実際に調べて勉強を進めるからである。また小学校5年生の社会科では、日本全体の農業から運輸業まで、いわば系統地理の中の経済地理の内容を学ぶことが、文部省の指導要領によって規定されているからである。しかしながら、実際には「働く人の苦勞やくふう」、「人間の生き方」などおおよそ地理教育とはかけ離れた内容が強調されて学習されている場合が多い(社会科としては必要な視点だが)。さらに、児童の発達段階からは、鳥海公「地理の見方・考え方の発達とその啓発—第5報—」、房総研究11、1974、1頁に小学校中学年から具体的事象はもとより写真・地理など間接経験からも地理的事象がある程度理解できるようになる点が指摘されている。
- 2) 拙稿「事実認識から要因追求する単元構想とその展開—小4「明治用水」の実践を通して—」、地理学報告61、1985、25~34頁。
- 3) 拙稿「地域学習における共通問題の設定方法とその検証—小3「商店街」の実践を通して—」、地理学報告66、1988、12~21頁。
- 4) 拙稿「実践三河仏壇における地理教育的視点—第1報—」、地理学報告68、1989、199~207頁。
- 5) 松井貞雄「小学校中学年社会科学習指導の地域観察について」、愛知教育大学研究報告(教育科学編)18、1969、1~14頁。
- 6) 出石一雄「地理の見方・考え方の発達に関する実証的研究—地理的能力調査の一例として—」、新地理18-1、1970、44~61頁。
- 7) 鳥海公「地理の見方・考え方の発達とその啓発—第一報—」、房総研究10、1973、54~63頁。
鳥海公「地理の見方・考え方の発達とその啓発—第2報—」、新地理21-1、1973、34~48頁。
鳥海公「地理の見方・考え方の発達とその啓発—第三報—」、新地理21-2、1973、33~39頁。
鳥海公「地理の見方・考え方の発達とその啓発—第四報—」、新地理21-3、1973、27~35頁。
鳥海公前掲1)、1~12頁。
- 8) 朝倉隆太郎「地理的学習能力の発達と育成」(朝倉隆太郎・栃木県教育研究所『社会科学習能力の発達と育成』、明治図書、1976、所収)18~93頁。
- 9) 安藤正紀「戦後地理教育界における学力観に関する予察的考察」、新地理27-2、1979、40~48頁。
- 10) 山口幸男「わが国における地理意識研究の分類と文献」、新地理35-4、1988、33~39頁。
- 11) 滝口昭二「小中高における地理の見方・考え方の系統」、新地理21-2、1973、20~31頁。この研究は様々な文献を挙げて、理論的な系統表を作成している。しかし、厳密な意味での「地理の見方・考え方」の定義には至っていないと筆者は読んだ。
- 12) 地域論的考察とは、1つの地域内で地域分化した様子やその役割を理解すること、またその有機的関連の状況も含んでいる。地域形成論的考察とは、1つのまとまった地域がどのように形成されたかを考察することを筆者は想定している。
- 13) 字句解釈としても、地理の見方・考え方の定義は難しいが、最終的には実践において検証されなくては、教育上の意味を持たないという意味において、仮に定義するものである。
- 14) 中山修一『地理にめざめたアメリカ』、古今書院、1991、85~93頁。
- 15) 地理教育検討委員会「地理教育検討委員会答申」、地理学評論63-6、1990、397頁。
- 16) 中山修一氏は、「アメリカ合衆国における地理教育復興運動の動向」、人文地理43-5、1991、62頁において日本の社会科について、社会制度や政治体制をめぐる知識重視型の学習目標が、批判的思考力や意志決定能力の育成よりも重視されることになり易い、と指摘した。しかしながら、地理教育検討委員会からの答申でもわかるように、小学校の社会科教育の実践では、必ずしもそうならない状況がある。
- 17) 筆者が10年間経験した小学校の教育実践では、常に話し合い学習や調べ学習が評価の高いものとされてきた。それらに、体験や作業を取り入れて、様々な授業の工夫がなされている。知識重視型の授業は一部に残るものの、高い評価を受けない現状にある。文部省は同様の指導を実践者に行っている。文部省『小学校学習指導要領』、大蔵省印刷局、1988、1頁、第1章総則には「…(前略)…自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力の育成を図る…(後略)…」とある。文部省『小学校指導書社会編』、学校図書株式会社、1988、2頁、に「…(前略)…社会科における思考力判断力の育成を重視し…(後略)…」とある。また、教育実践論文の傾向としては、豊田市教育委員会『研究紀要76』、1992、48頁で「論文のテーマを取り上げてみま

- すと、自ら…、一人一人の…といった子どもの積極的な学習ぶりを前面に押し出したものが目立ちました」とある。
- 18) 文部省、前掲17)『小学校学習指導要領』、3～4頁。
- 19) 特に、教育の問題については、実践した結果としての検証を経なくては、様々な議論も重要な意味を持たないと考える。従って、理論的な研究に加えて、実践上の授業記録を重視する研究姿勢を訴えるものである。
- 20) なお、この単元に入る前提として、5年生(1989年)の4～5月段階で、全国の地方名や県名、都市名を覚える学習を行った。具体的には、クイズを出したりプリントを配ったり、テストを行って基本的な全国地名を押さえる努力を行った。
- 21) 工場見学から2カ月以上の時間が過ぎていたせいもあるが、むしろ、自動車工場の見学自体がわかりにくいという理由が強い。大きな工場内で数多く立ち並ぶ機械類については、教師が見てもわかりにくいものである。工場の学習だけを考えるならば、食品加工場のほうが理解しやすい。また、自動車工場の学習に限定するならば、見学で雰囲気をつかんだ後で、本稿のようにビデオで局部的に再度集中して映像を見て、解説を聞くという2段階の指導過程が必要なのことがわかった。
- 22) 東京書籍『新しい社会5年下』、1988年3月31日改訂検定済、1989年7月10日発行。
- 23) 東京書籍、前掲22)、20頁。
- 24) この考えには理由があった。最初の5年生を担当した時、立地条件を考えるためにトヨタの自動車工場や三河仏壇などの個別の事例を取り扱った。しかし、その立地条件がなかなか説明がつかなかった。いろいろ考えられるが決定的なものはなく、むしろ偶然性の方が説得力を持つようになってしまった。それと対照的に、全国スケールの分布の特色から立地条件を考えれば、種々の立地条件が自然に考えられる。このような理由からこの授業を構想したが、その手応えは十分にあった。
- 25) 斎藤 毅「産業学習の新単元・こんなメニューいかが」、教育科学社会科教育5、No. 336、1990、55頁。
- 26) 本稿に資料として掲載した授業記録は、全て実際の授業の話し合いをテープ録音して、それを1つ1つ文字として起こしたものである。従って、児童の話し言葉の中に文法上不適切であったり、無用な繰り返しの表現が見られる。本稿では、なるべく授業の実体を生のまま公開するという考えから、あえて修正しなかった点をご理解願いたい。
- 27) 名古屋市の栄小学校5年生の名古屋仏壇の授業(全国小学校社会科研究大会1990年10月27日参観)では、資料の読み取りに甘いものを感じた。もちろん、地域素材を十分に取り入れて調べているという別の観点からは、実にすばらしい実践であることを認めた上である。
- 28) イニシャルの次にbまたはgがついているのは、boy、girlの略である。同じイニシャルの場合、男女の区別をするためにつけた。
- 29) 拙稿、前掲2)参照。
- 30) 実地調査という視点は、地理学の立場から考えると他の考察とは区分されるべきである。しかし、現実の場面で児童に教える能力としては何の区別もないものと筆者は理解している。小学生にとってこの区別は意味を持たないと考える。
- 31) 安藤正紀「方位概念の獲得—小2「ものの位置」を通して—」、地理学報告59、1984、9～17頁。
- 32) 残念ながら小学校における現場教師のほとんどは、日本地理学会内で行われている地理教育の議論を知らない。また、アメリカでの地理復興運動も知らないのである。このままでは、何も状況は変わらないと考える。